

上の林遺跡

(第4次)

長野県上伊那郡箕輪町
緊急発掘調査報告書

昭和61年

箕輪町教育委員会

上の林遺跡第4次調査

昭和61年

箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会

教育長 樋口彦雄

上の林遺跡については、箕輪工業高等学校の改築が順次進められるのに応じて、既に昭和55年度に第一次、56年度第二次、57年度第三次と緊急発掘を実施し、其の報告をした。

昭和60年度に至り、次の校舎改築に伴い第四次の緊急発掘を行なった。第一次～第三次同様に事業の総てを町教育委員会に委託された。町教育委員会ではこれも積極的に受けとめ、県教育委員会文化課の綿密な指導助言を仰ぎ事業を推進した。

従来当教育委員会の発掘の作業には、町内の大学生・高校生及び地元の作業員によって、発掘を行ってきたが、今回は伊那市教育委員会の飯塚政美氏及び伊那市の作業員が、作業に加わって充実した調査体制をつくることができた。

調査結果の細部については、章を追って明らかにするが、主なものとして5個の紡錘車が出土したことである。一住居址内から5個という例は少なく特筆すべきことと思う。

今回をもって高校改築計画の大略は一応終了したと思うが、高校敷地全域が遺跡であるため今後更に新たな計画を進める場合は、今まで同様に、調査の依頼は受けたい考えを持っているので、地下に眠る貴重な文化遺産を保護するための配慮をお願いしたい。

酷暑の中で厳しい作業を続けていただいた調査参加の皆さん、また本報告書作成にあたられた、関係各位に厚く御礼を申し上げます。

例 言

- 1、本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13,238番地に所在する上の林遺跡第4次調査の報告書である。
- 2、本調査は、箕輪工業高等学校の委託を受けて、箕輪町教育委員会が実施した。
発掘調査は昭和60年6月1日～6月17日まで実施し、引き続き整理作業を行なった。
作業分担は次の通りである。
土器の復元 — 福沢幸一 遺構実測図の整理・トールス — 石川 寛、山内志賀子、
小池君代、竹入洋子、柴登巳夫 土器の実測・トールス — 竹入洋子、柴登巳夫
石器実測・トールス — 山内志賀子、竹入洋子 土製品実測・トールス — 竹入洋子
土器拓本 — 山内志賀子 写真図版の作成 — 山内志賀子、柴登巳夫
- 3、本書に掲載した遺構・遺物の写真は柴登巳夫が撮影したものを使用した。
- 4、本書の執筆は樋口彦雄(教育長)、柴登巳夫、飯塚政美が担当した。
- 5、本書の編集は発掘調査団が行なった。
- 6、本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

凡 例

- 1、各遺構の略号は次の通りである。

縄文時代の住居址 — J 弥生時代の住居址 — Y 平安時代の住居址 — H
土壇 — D

本 文 目 次

題 字	教育長	樋口彦雄
序	〃	〃
例 言・凡 例		
本文目次		
挿 図 目 次		
図 版 目 次		
第 I 章	調査地の立地	1
第 1 節	位 置	1
第 2 節	自然環境	2
第 3 節	歴史的環境	3
第 II 章	発掘調査の経過	5
第 1 節	発掘調査に至るまで	5
第 2 節	調査の概要	5
第 III 章	発掘調査の結果	8
第 1 節	調査結果の概要	8
第 2 節	遺 構	8
	1、住居址	8
	2、集石炉	15
	3、柱穴址	16
	4、土 塚	16
第 3 節	遺 物	17
	1、土 器	18
	(1) 出土土器 1	18
	(2) 弥生土器	19
	(3) 土 製 品	21
	(4) 出土土器 2	21
	(5) 出土土器 3	23
	2、石 器	23
第 IV 章	ま と め	26

挿 図 目 次

第1図	位置図	1
第2図	遺跡周辺地形図	2
第3図	周辺遺跡分布図	4
第4図	周辺地形図及び発掘区域図	7
第5図	遺構全測図	9
第6図	Y-1号住居址実測図	10
第7図	Y-2号住居址実測図	11
第8図	Y-3、H-1号住居址実測図	12
第9図	H-2号住居址実測図	13
第10図	H-3号住居址実測図	14
第11図	H-3号住居址カマド実測図	14
第12図	集石炉実測図	15
第13図	柱穴址実測図	16
第14図	土壇実測図	16
第15図	出土土器拓影	17
第16図	弥生土器実測図	20
第17図	土製品実測図	21
第18図	出土土器実測図2	22
第19図	出土土器実測図3	23
第20図	出土石器実測図	24

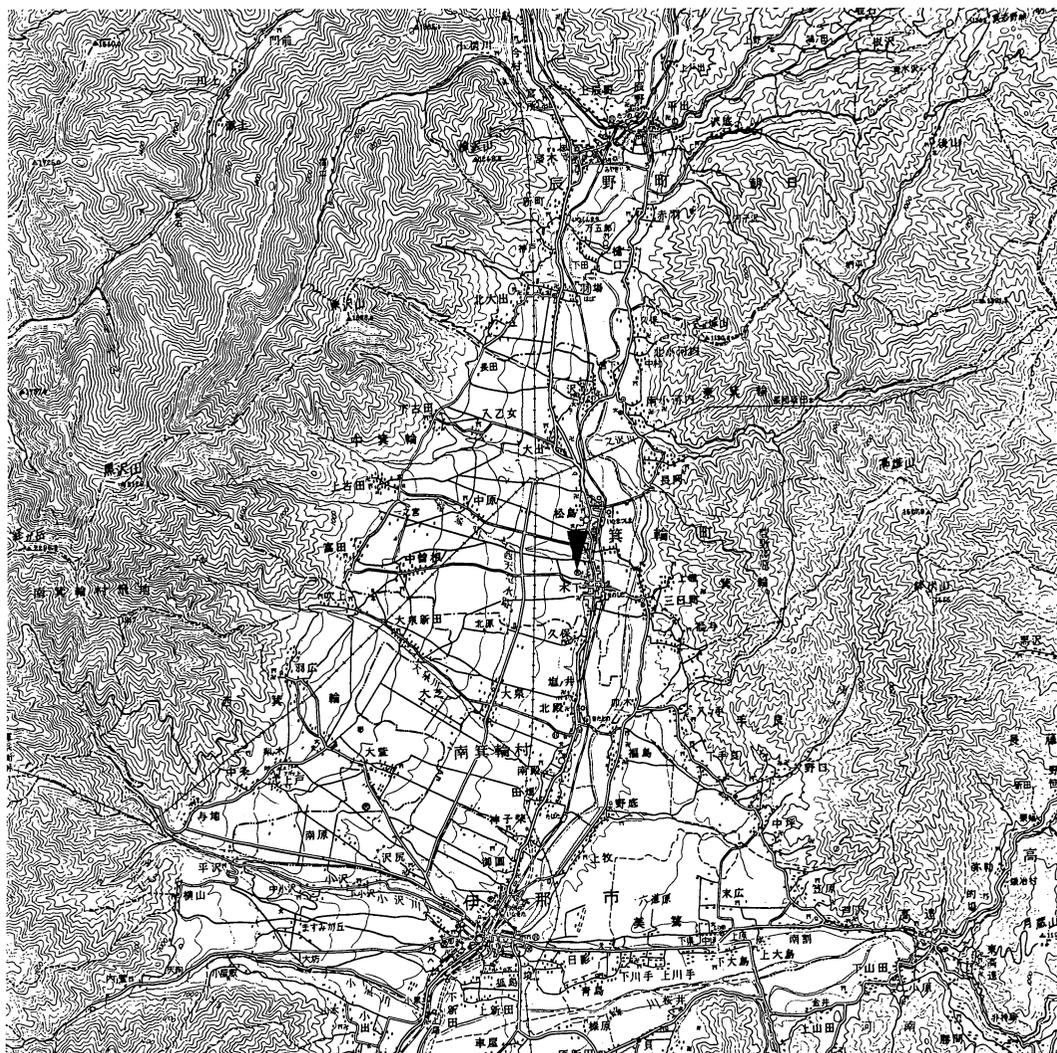
図 版 目 次

- 図 版 I 発掘調査地
- 図 版 II 遺構状況
- 図 版 III Y-1号住居址、Y-2号住居址
- 図 版 IV Y-3号住居址、建造物址、H-1・Y-3号住居址
- 図 版 V H-2号住居址、H-3号住居址
- 図 版 VI 集石炉・土壇
- 図 版 VII カマド状況
- 図 版 VIII 遺物出土状況
- 図 版 IX 調査進行状況
- 図 版 X 発掘風景

第1章 遺跡の立地

第1節 位置 (第1図)

上の林遺跡は長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13,238番地に所在し、そのほとんどが、県立箕輪工業高等学校の敷地となっている。遺跡は第三段丘の突端に位置し、左右に続く段丘上はほとんど遺跡の密集地帯となっている。段丘下からは豊富な湧水が随所に見られ、住居を設定するには最も適した自然環境の地と思われる。眼下に見る国道から400mほど離れ、天竜川との比高 40 mを計る。



第1図 位置図

第2節 上の林遺跡付近の自然環境

箕輪町は、東の三つ峰（1,400m）から、西の黒沢山（2,100m）、北は漆戸部落（720m）から、南は木ノ下部落（700m）の広がりを持つ地域である。

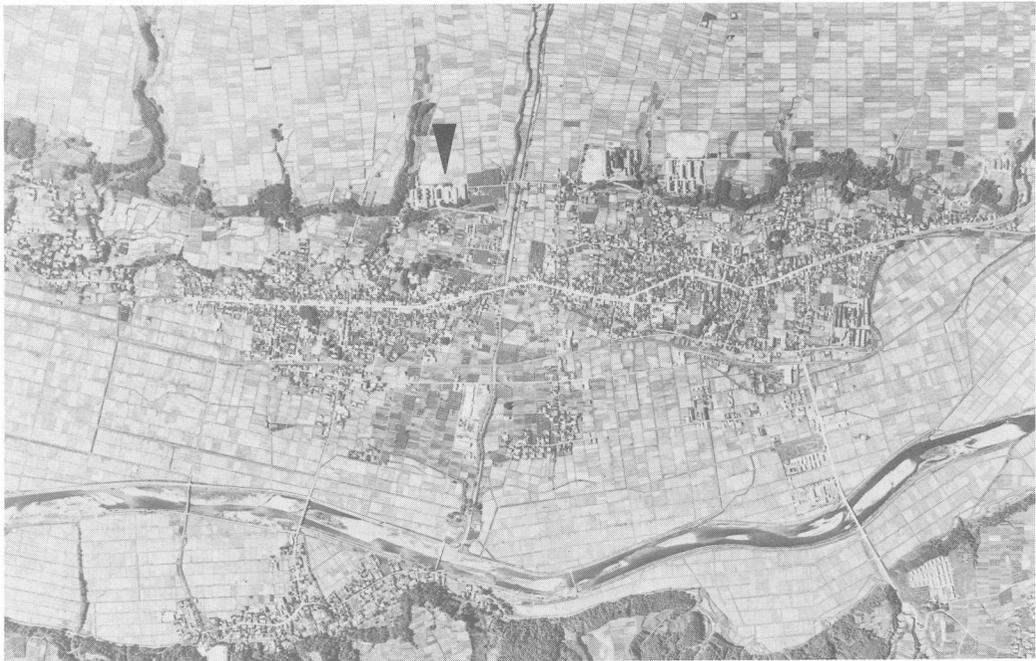
このほぼ中央を天竜川が北より南に流れて伊那谷を形成する。この天竜川より東の山地は赤石山系に、西は木曾山系に属するが、この西の裾から広がる扇状地の末端の河岸段丘の上に上の林遺跡がある。また西の山系は変成岩を主とし、チャートの露頭もあり、粘板岩、礫岩も見られ、天竜川に至る間は、天竜礫層を経て沖積層となっている。この天竜礫層をおおっているのが、御岳ロームである。ロームについて、西の山麓にある箕輪西小学校の全面改築の際のボーリング検査の結果約25m、学校と上の林遺跡との中間、中原部落の箕輪町二水道削井工事の報告によれば約70mほどの地下に砂礫混入のロームを確認している。

上の林遺跡のある扇状地の末端の段丘崖には常に湧水が多く、現在も湧き出ており、広く利用されている。扇状地に田切地形をつくっているのは、近くの帯無川である。天竜川に流入するわけであるが、川の名称が尾水無川から転じたと言われる位に伏流水となっている。

西山麓への扇状地は、現在川岸より取水し伊那市に至る26kmの用水路(西天竜)を開発し上伊那の穀倉となっているが、開田前は平地林が山麓まで続いていた。

段丘崖、ローム層、原野はここに先史、原始時代の住居跡の多いことの要件と考える。

(樋口 彦雄)



第2図 遺跡周辺地形図

第3節 歴史的環境

箕輪町は天竜川をはさんで典型的な河岸段丘と、数多い扇状地とが独得の地形を作りだし、絶好の居住性をもつ一帯は遺跡分布の密な地域である。先史より近世に至るまでの歴史上の遺跡に富み、その総数200ヶ所に及び伊那谷においても屈指の遺跡地帯である。町内の遺跡を立地する条件により分類すると、次の四つに分けられる。

第1群 経ヶ岳山塊の山麓付近に立地する遺跡。

第2群 天竜川西岸の段丘上に列上に並ぶ遺跡。

第3群 天竜川東岸の段丘上及び扇状地に立地する遺跡。

第4群 低位段丘（沖積段丘）の遺跡。

上の林遺跡は第2群に属する遺跡の一つである。まずこの段丘上の遺跡群について考察すると南側には洞一つ隔てて位置するのが北城遺跡である。第2群中において最大の規模を持っていると思われる。昭和46年長野県企業局の分譲住宅地造成事業に伴い緊急発掘調査を実施し、縄文中期から中世に至る大複合遺跡であることが判明した。この調査において弥生時代後半の大集落の一部とみられる23戸の堅穴住居址と20余基の中世火葬墓群が検出され注目される遺跡である。その南には南城遺跡、猿楽遺跡と続き、それぞれ発掘調査が実施されている。

町境になっている油ヶ沢を越えて南箕輪村の遺跡群に目を移すと、やはり段丘上には多数の遺跡が存在している。沢を越えると、南垣外、丸山、天王森、上人塚、垣外と並び、天伯遺跡は昭和42年の土地改良事業に伴う緊急発掘調査によって、縄文中期から平安時代に至るまでの大複合遺跡であることが確認されている。又その南には昭和33年の発掘調査によって、ローム層内から発見された槍先型尖頭器をはじめとする多数の石器類が出土した神子柴遺跡がある。

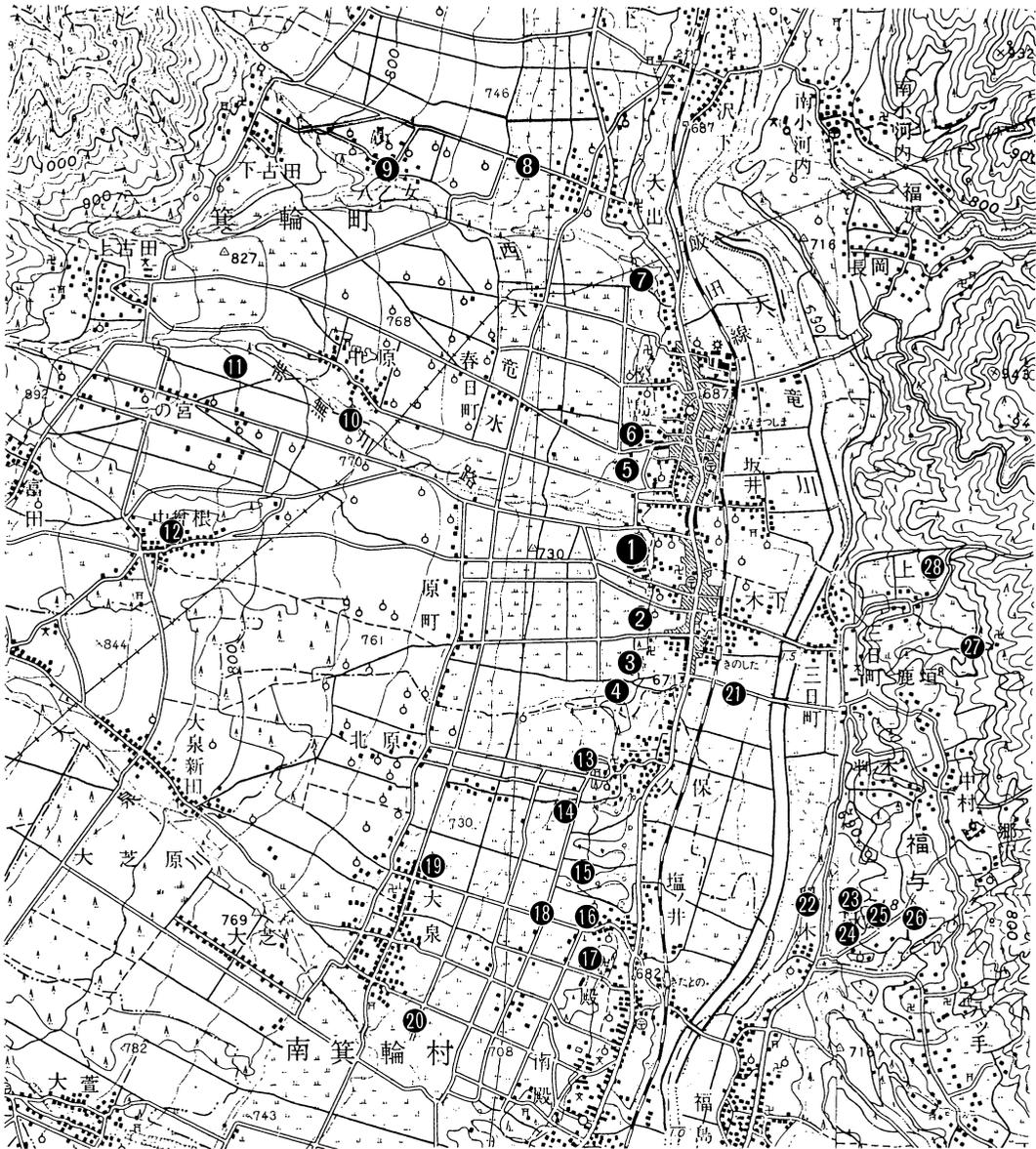
次に上の林の北側には、藤山、中山、本城と続き、深沢川南の段丘上突端には上伊那郡唯一の前方後円墳「松島王墓」がある。前方部が後円部よりやや高く、中央のくびれ部の左右に造り出しが付けられ、この点県下で唯一の車塚形式の古墳である。

次に第4群の低位段丘の遺跡に目をやると、天竜川氾濫原上に在る代表遺跡として「箕輪遺跡」をあげなければならない。箕輪遺跡は飯田線木下駅東方から、南箕輪村塩ノ井地籍までの広範囲に及ぶ大遺跡である。昭和27年から施行された土地改良事業によって、当該地籍から縄文時代中期より近世に至る多量の遺物が出土した。なかでも注目されたのは、田舟、田下駄、木製人形、木製農耕具、木器類、更には延長4,000メートル余、数量数万本に達するといわれた木杭等である。昭和55年度から一部に発掘のメスが入れられている。

古墳時代に松島王墓古墳が築かれたり、中世末（天正10年）には箕輪遺跡の中央に位置する水田の中に「田中城」が築かれたのも、一帯から生産される米が大きな力となっていたであろう。弥生時代から近世に至るまで、段丘上の集落と段丘下沖積面の水田とのかかわりは、米生産を

背景とし、政治、経済の中心地として続いたのである。

(柴 登巳夫)



- ①上の林 ②北城 ③南城 ④猿楽 ⑤藤山 ⑥中山 ⑦王墓古墳
- ⑧中道 ⑨五輪 ⑩並木下 ⑪一の宮 ⑫中曾根北 ⑬向垣外 ⑭山の神
- ⑮天伯 ⑯上人塚 ⑰垣外 ⑱内城 ⑲大泉 ⑳宮の上 ㉑箕輪遺跡群
- ㉒北垣外 ㉓黒津原 ㉔矢田 ㉕上金 ㉖大原 ㉗澄心寺下 ㉘御射山

第3図 周辺遺跡分布図

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

上の林遺跡は町内に存在する多数遺跡中において、出土遺物の豊富さもさることながら、遺跡の密度の点からも町内を代表する一つである。昭和55年度から始まった発掘調査は、校舎改築と平行して過去三回実施されている。縄文時代早期から平安時代まで、ほぼ途切れることなく続いた人々の生活は、発掘調査により、遺構・遺物よりそれを確認することができる。

今回は第IV次調査として調査の指示があり、長野県教育委員会文化課の指導のもとに調査計画を検討した。校舎改築は昭和61年度以後になるが、埋蔵文化財発掘調査は本年度中に実施ということである。

発掘調査は記録保存を目的とし、昭和60年6月1日より6月17日まで実施し、以下に記すような内容である。

第2節 調査の概要

- ・遺跡名 上の林遺跡
- ・所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13,238番地
- ・発掘期間 昭和61年6月1日～6月17日
- ・調査委託者 箕輪工業高等学校長 山極 隆久
- ・調査受託者 箕輪町教育委員会
- ・調査団の構成は次の通りである。

顧問	丸山 徹一郎	埋蔵文化財センター第二部長
団長	樋口 彦雄	箕輪町教育委員会教育長
担当者	柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
調査員	飯塚 政美	伊那市教育委員会職員
〃	石川 寛	箕輪町役場職員

作業協力者

藤森 秀男	野沢 徳章	小林 信義	柴 佐一郎	後藤 重美	山内志賀子
小池 君代	小林 光治	松田 幸雄	清水 節治	唐木 由人	堀内 昭三

酒井岩夫 野沢良久 酒井とし子 埋橋程三 唐沢清人 三沢 寛
 大野田三千代 大野田 英 建石紀美子 網野実子

参 与

堀口 泉	箕輪町教育委員会教育委員長
桑沢良平	” 教育委員
那須与一	” ”
小島迪彦	” ”
荻原貞利	文化財保護審議会委員長
平沢新平	” 副委員長
矢沢喬治	” 委 員
小林正之進	” ”
小林健男	” ”
山口豊春	” ”
有賀英幸	” ”
原 久美	” ”
市川脩三	” ”
向山 章	” ”

調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

樋口彦雄	箕輪町教育委員会教育長
北川文雄	” 社会教育課長
太田文棟	” 社会教育係長
柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
竹入洋子	”



第4図 周辺地形図及び発掘区域図

第Ⅲ章 発掘調査の結果

第1節 調査結果の概要

昭和55年から実施されている上の林遺跡の調査は今回で4次の発掘となり調査面積も2,000㎡を越し、遺構総数も数十ヶ所となっている。調査の位置が南に移動するにつれ、遺構内容に変化が見えている。それは、第1次、2次調査時は縄文時代の遺構・遺物が多かったが、第3次・第4次と南に寄るにつれ、弥生時代及び、平安時代の遺構が多くなる傾向にある。今回の第4次調査においては縄文時代の住居址は検出されなかった。

遺構の概要は次のようである。

縄文時代集石炉1ヶ所、弥生時代住居址3ヶ所、平安時代住居址3ヶ所、縄文時代土壇1ヶ所である。このうちY-2号住居址から土製紡錘車が5個出土したことは、きわめてめずらしいことであった。また3ヶ所づつ検出された弥生時代と、平安時代の住居址はそれぞれ、ほぼ同時期の住居址と思える。各時代の遺構及び遺物については各節ごとに記した。

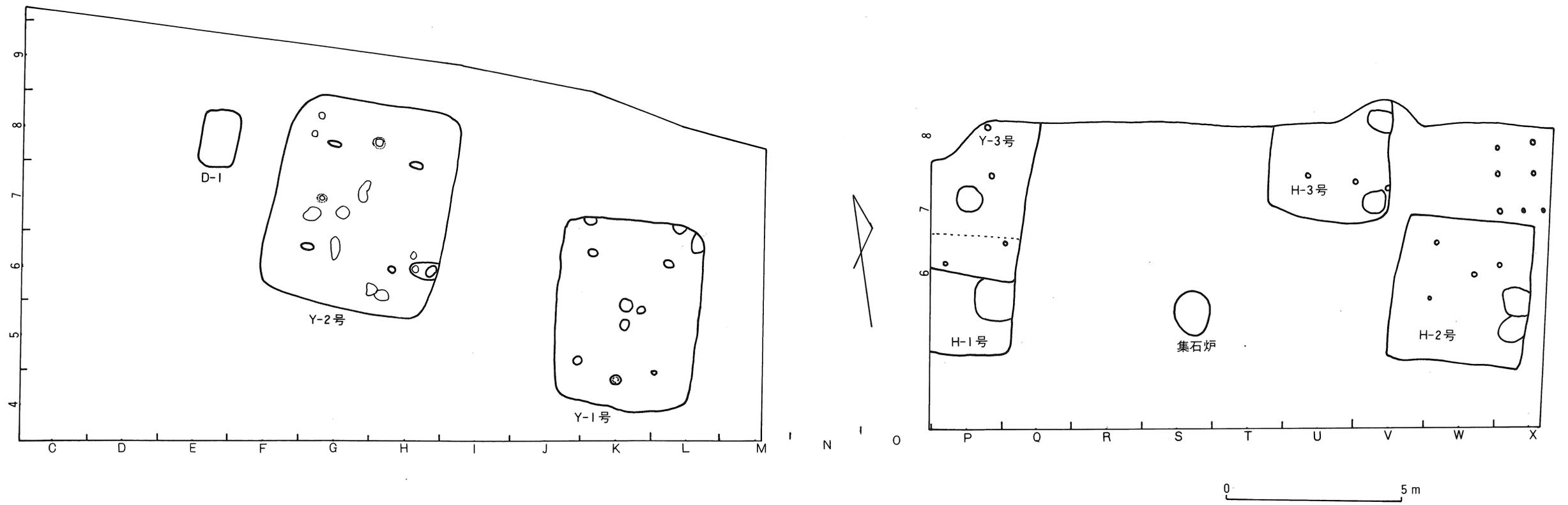
第2節 遺 構

1. 住 居 址

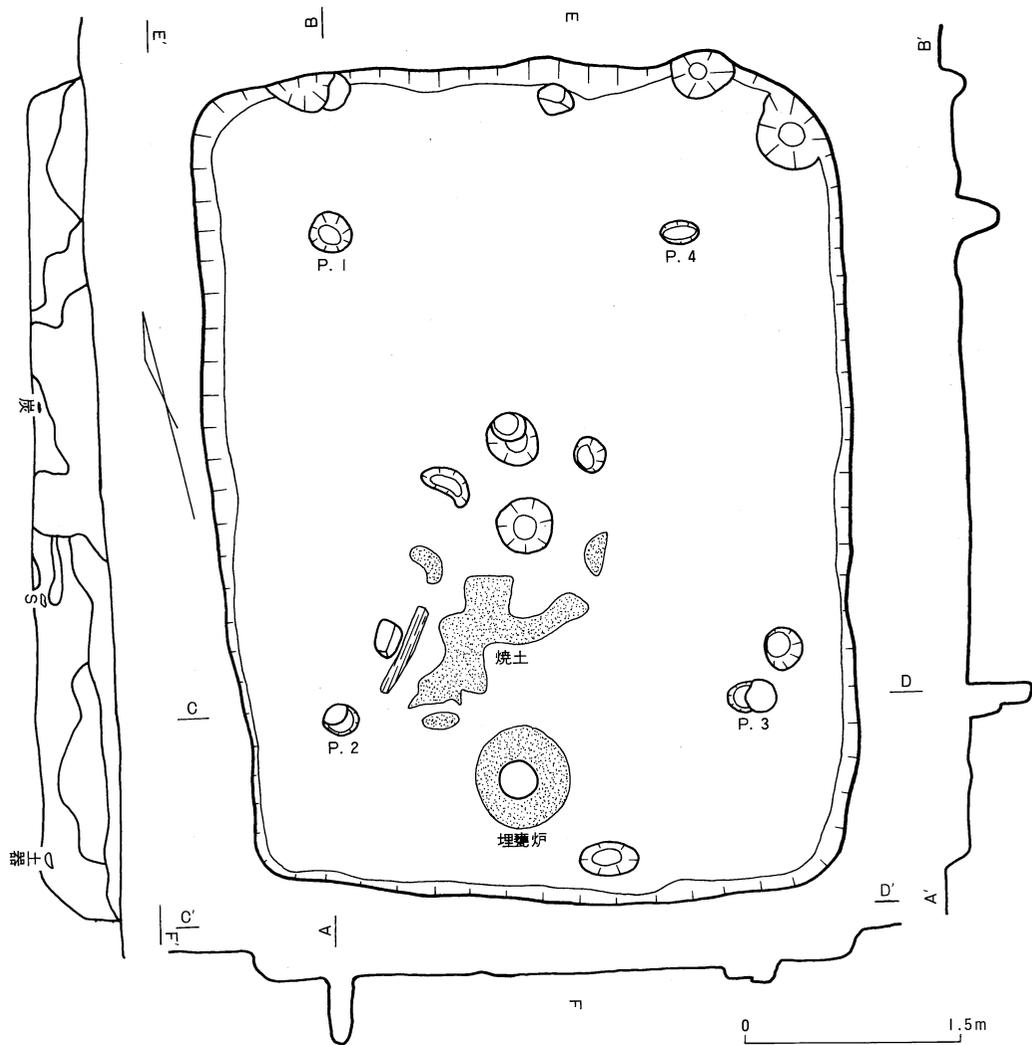
(1) Y-1号住居址 (第6図)

発掘調査の範囲は東西に長い長方形を呈している。中央に渡り廊下が位置しているため、二か所に分れた形となった。西側の調査区K・L-5・6グリッドを中心に検出されたものをY-1号住居址とした。東西4.5m、南北5.7mの長方形を呈し、四主柱穴を呈した住居址である。調査範囲内は水道の配管により一部攪乱されていたが、プラン確認は土色の変化がはっきりしていて容易であった。プラン確認時における際、住居址の覆土中から炭化物や焼土が多く認められている。また床面精査の時点でも床面に貼り付くように炭や焼土が発見された。このことから本住居址はある時期に火を受けたものと考えられる。床面はほぼ平らであり、堅く踏み固められている。住居址内のピットは主柱穴4か所と中央に4か所のピットが主なものである。

埋甕炉は、南壁寄り中央に位置し、胴上部と底部を欠く壺を正位に埋設しており、その周囲が巾10～15cm程度焼土化している。主柱穴は15～20cmの径を計り、比較的細い柱を使っている。P.4のみ楕円形の穴で、他は円形を呈している。同じ段丘上で後期の住居址の主柱穴は楕円形のものが多い。出土遺物からみて弥生後期後半の時期である。(柴 登巳夫)



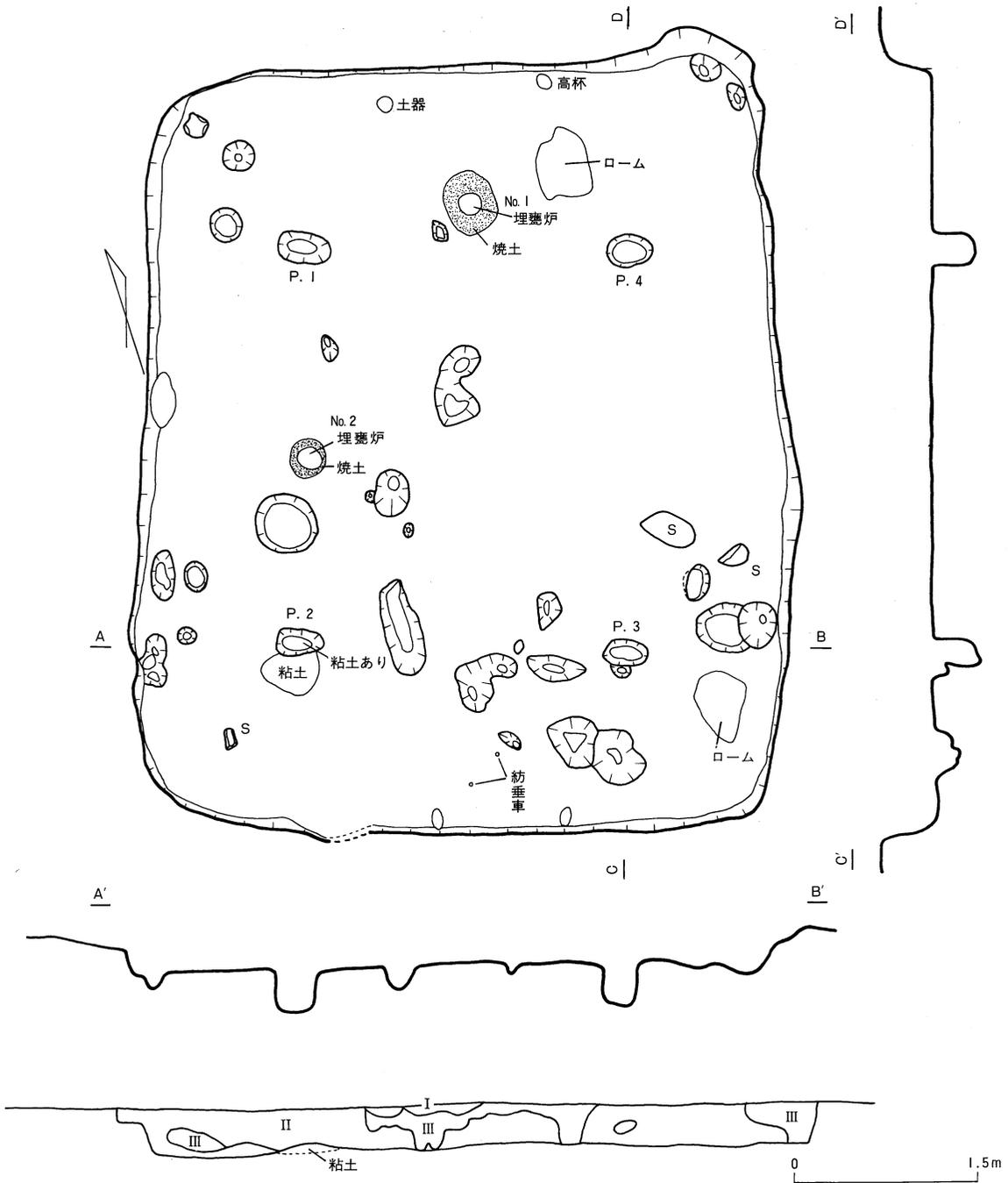
第5図 遺構全測図



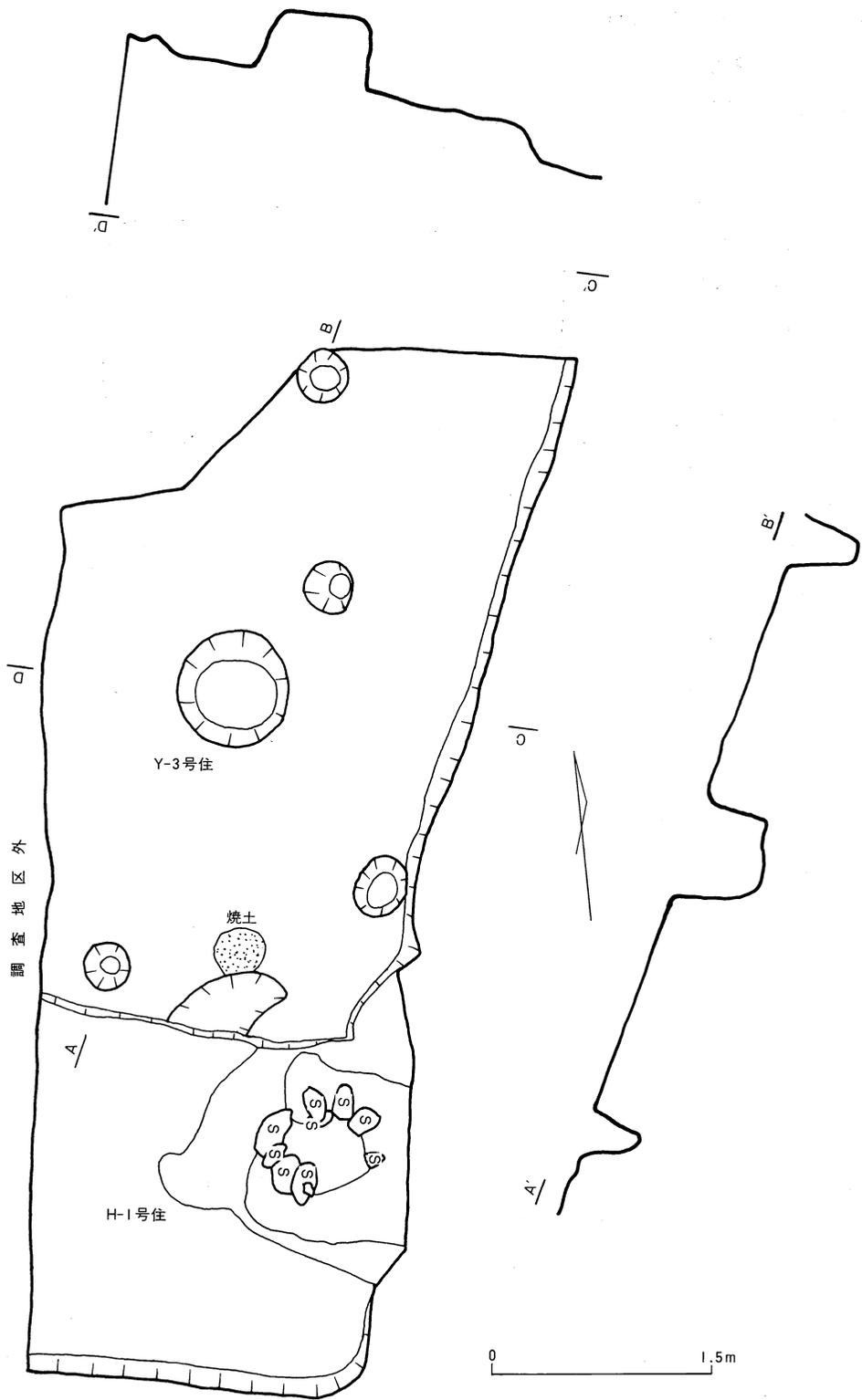
第6図 Y-1号住居址実測図

(2) Y-2号住居址 (第7図)

調査区西寄りのH・I-6・7グリッドを中心に検出された住居址である。平面プランは主軸方位がほぼ北を示し、東西4.85m、南北6.1mを測る隅丸長方形を呈している。壁はやや急な斜壁で部分的に軟弱な所が見られる。北壁寄り中央と西壁寄り中央の二か所に埋壺炉が埋設されている。北壁寄りのものは底部を欠いた壺を正位で用いており、西壁寄りのものは口縁部に近い5cm程度を用いて逆位で埋設されている。主柱穴はほぼ等間隔に四か所に配され、東西に長い楕円形を呈している。深さはいずれも床面から30~35cm程度である。住居址の南寄りには二か所に粘土の固まりが検出された。埋壺炉は座光寺原式を示しているため本住居址は弥生時代後期後半に位置付けられる。(柴 登巳夫)



第7図 Y-2号住居址実測図

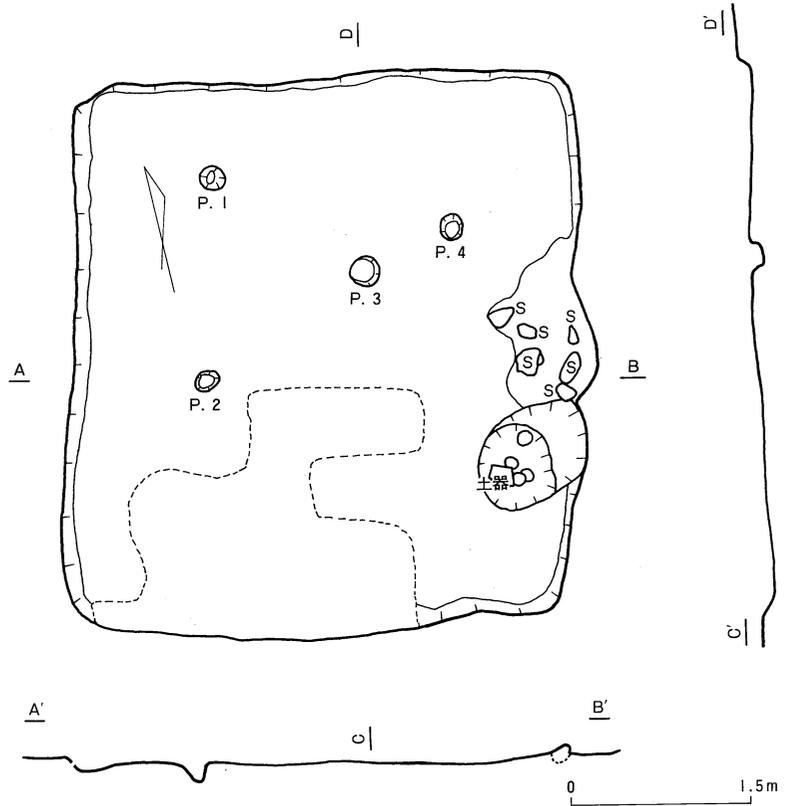


第8图 Y-3、H-1号住居址实测图

(3) Y-3、H-1号住居址 (第8図)

本住居址は調査区東側のQ-5、6、7グリッドに位置している。校舎廊下により一部分しか検出できなかった。Y-3号住居址の上にH-1号住居址が乗る状況で切り合っている。Y-3号住居址も出土遺物からみて、前述のY-1、2と同時期である。

H-3号住居址はカマドと南壁の一部が検出された。カマドはかなり形がくずれ両袖部と焚口を確認することができたが、煙道部は未確認である。出土遺物はカマド内と焚口部に集中している。これらの遺物は9世紀後半と見られるため、本住居址もこの時期である。

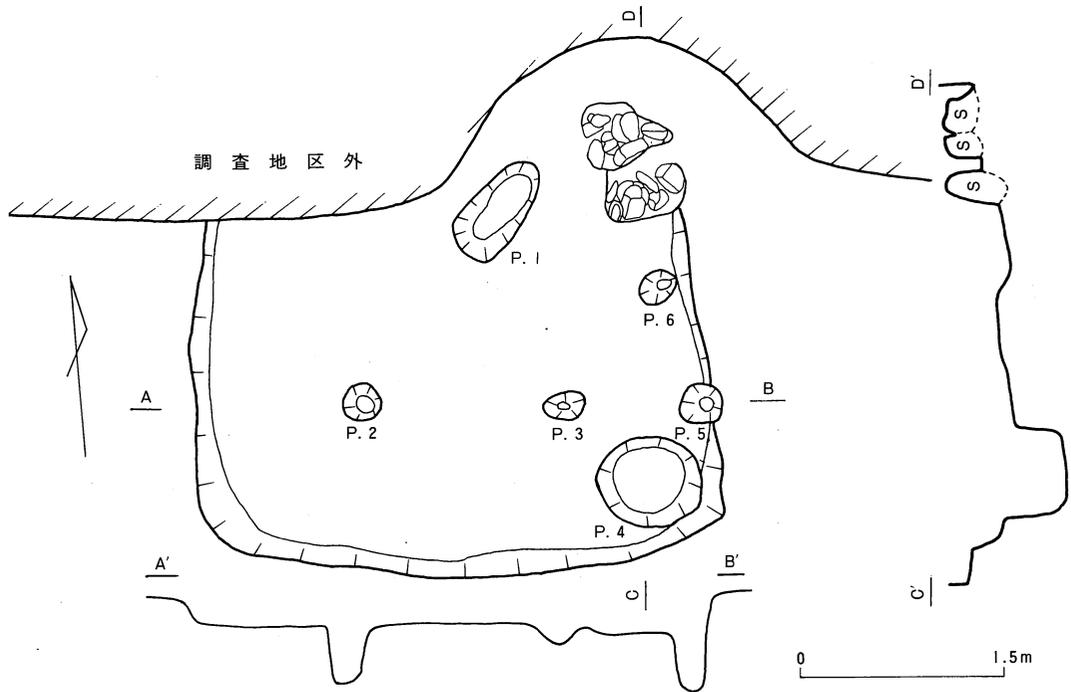


第9図 H-2号住居址実測図

(4) H-2号住居址 (第9図)

調査区東端に位置しほぼ全体の状況を確認することができた。平面プランは一辺4.5mの正方形に近い形を呈している。床面は南側が軟弱で一部掘り返しになっている。東壁中央にカマドを設けている。カマドを構成する袖石や粘土はあまり顕著ではなく、内部の焼土範囲も少ない。カマド右側には径60cmほどの円形ピットがあり、中から土師器杯などが集中して出土している。主柱穴と考えられるものはP₁の一か所のみで他は未確認である。床面が全体的に軟弱であったためピットを検出するのが困難であった。

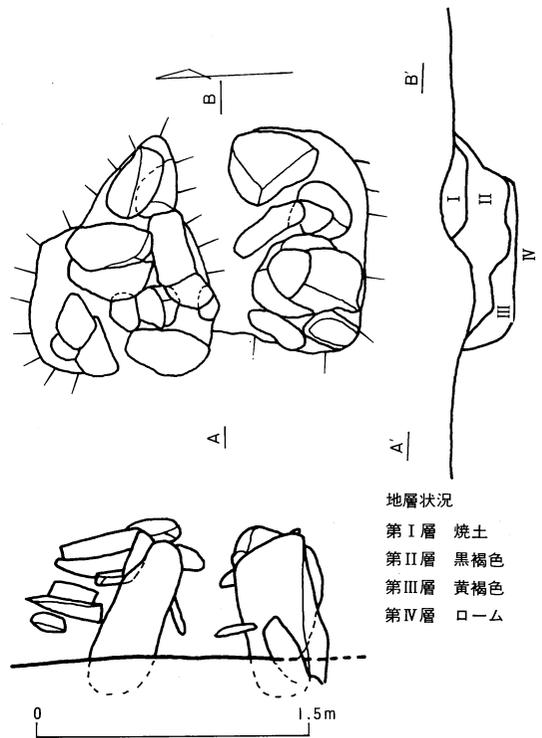
出土した坏などは9世紀後半のものと見られ、H-2号住居址と同時代の住居址である。



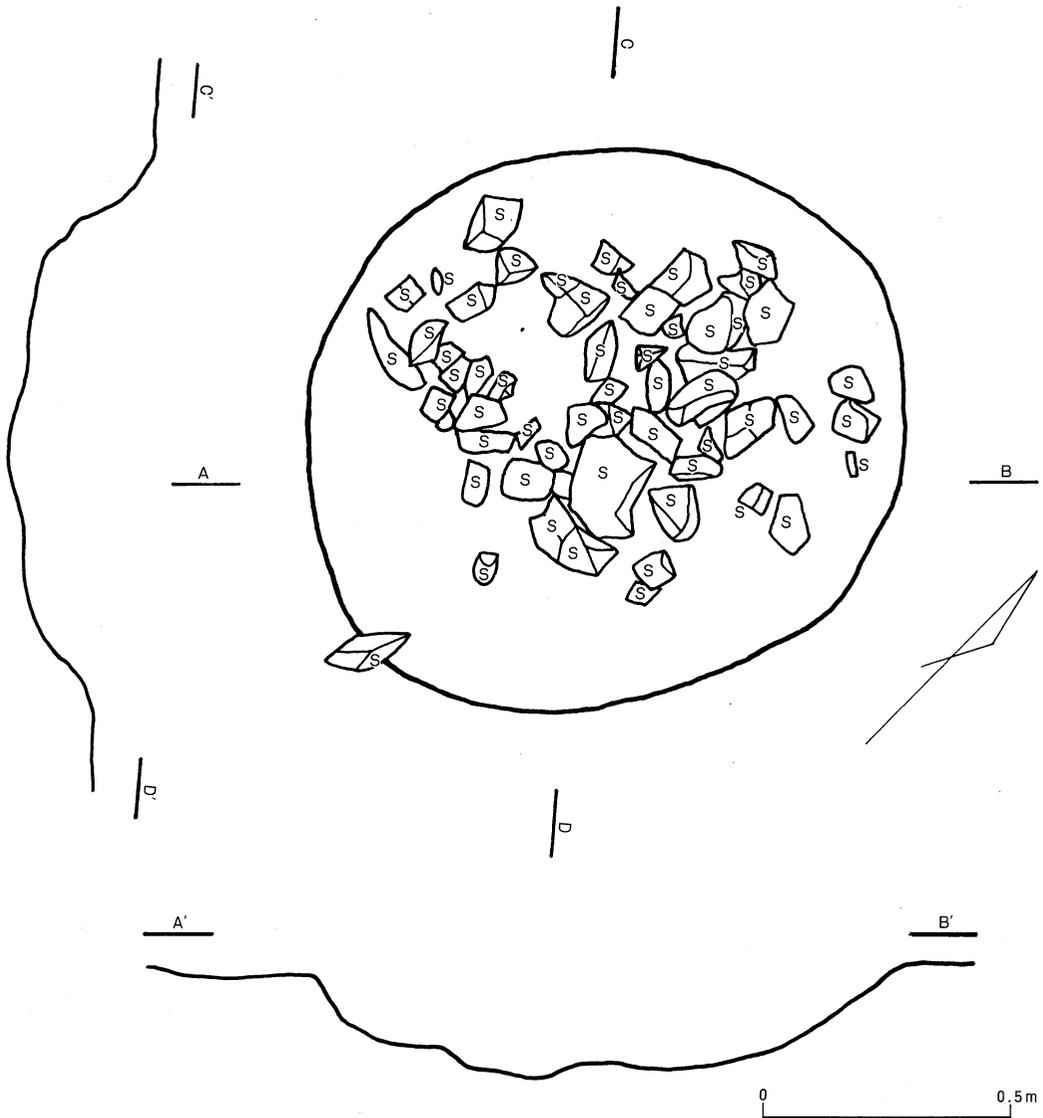
第10図 H-3号住居址実測図

(5) H-3号住居址 (第10、11図)

本住居址はU・V-7・8グリッド内に検出された。住居址の北側半分は調査区外のため全体の半分ほどの調査に留まった。平面プランは東西3.6m、南北4m程の隅丸長方形を呈する形であろう。壁高は15~20cmのゆるやかな斜壁である。床面は全体的に軟弱で、カマド前面は他に比べ堅さが一段と強くなっている。カマドは長径50cmほどの大石を床面下から立てて袖を形成し、非常にしっかりとした構造で形を整えている。三か所の平安時代の住居址に共通してカマドは東壁に位置していることである。これは、前回までの調査においても同様であった。



第11図 H-3号住居址カマド実測図



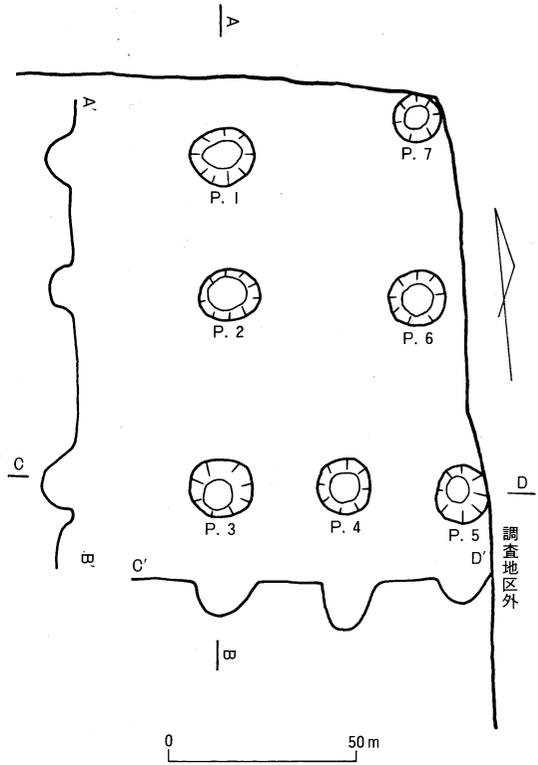
第12図 集石炉実測図

2. 集石炉 (第12図)

本遺構はT-5・6グリッド内に検出されたものである。集石は直径1.2mほどの円形内にまとめ、20cmの深さに積まれていた。石は角礫が多く、磨石を割って小さくしてから利用している状況も見られる。一辺10～15cmほどの石が多く総数は273個を数えた。石はほとんど焼けており、焼石炉という感じである。町内において一の宮並木下遺跡でほぼ同様な遺構が確認されている。時代を決定する遺物が出土していないが、縄文時代と考える。

3. 柱 穴 址 (第14図)

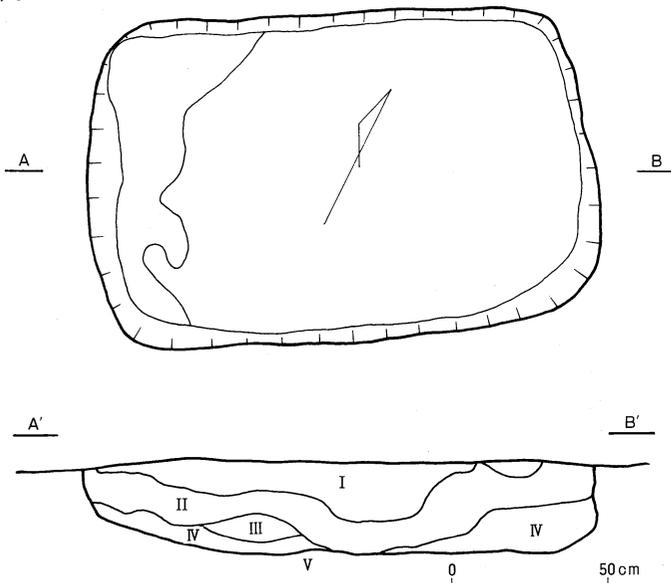
本遺構はX-8グリッドを中心に検出された。調査区の東北角のため全体の状況は不明である。柱穴址は列になって検出され、建造物の形態にはまちがいないが、調査地区外に柱穴址が何か所かあるものと思われる。そのため建造物址の規模は決定し難い。柱穴の形や深さは同じ程度であり、重複状態にはない。平安時代の住居址に伴う倉庫址であろう。



第13図 柱穴址実測図

4. 土 坑 (第15図)

土坑は調査区西側のE・F-7・8グリッド内に検出された。東西1.1m、南北1.7mの長方形を呈し、深さは落込み確認面より28cmを計る。側壁及び底部はわずかではあるが堅さが加わっている。覆土中から縄文中期初頭、中期中葉の土器片が少量出土している。縄文時代中期加曽利E期の土坑であろう。

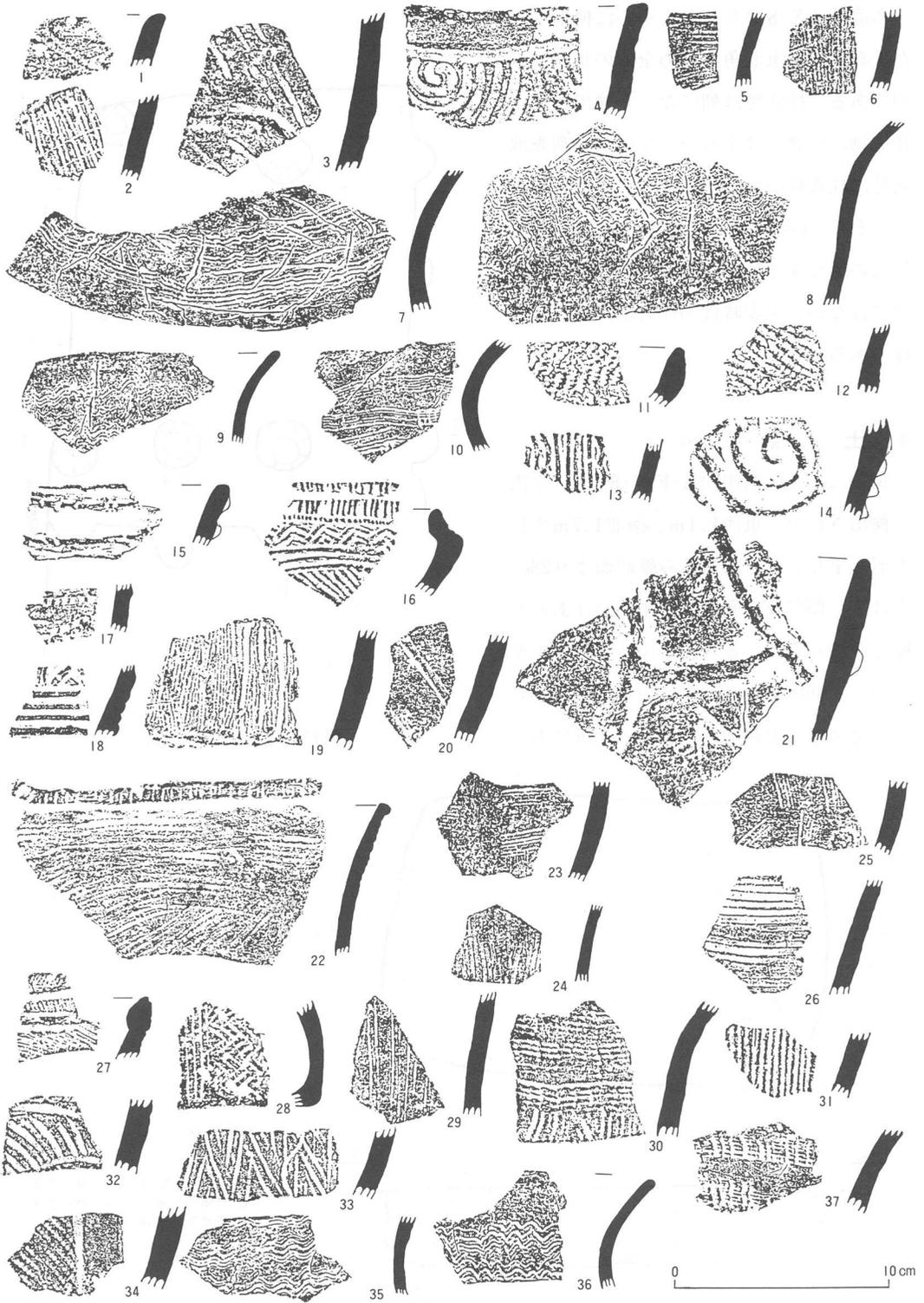


第14図 土坑実測図

地層状況

- I層 黒土層
- II層 茶褐色土層 ロームブロック含
- III層 黄褐色土層 ロームブロック含
- IV層 黄褐色土層 ロームブロック多量に含
- V層 ローム層

第3節 遺物



第15图 出土土器拓影

1. 土 器

(1) 出土土器 1 (第15図)

(1~10)はY-1号住居址覆土中より出土した土器片である。従って、縄文土器、弥生土器と一緒に混じっていても不思議ではない。(1)は口唇部が内そぎの破片であり、外面には絡縄体圧痕文がみられ、子母口式土器の第一特徴要素を備えている。茶黄褐色を呈し、焼成は普通で、多量の長石と雲母を含んでいる。(2)は竹べらによる沈線を縦位及び横位に走らせ、それが、あたかも井桁状になる。黒茶褐色を呈し、焼成は良好で、多量の長石を含む。下島直後形式と思われる。

(3~4)はへらによる幅広の沈線が施されているもの。色調は黒褐色(3)、黄褐色(4)を呈し、焼成は両片ともに普通、少量の雲母、長石を含む。(3~4)は加曽利E期の新しい方に比定されると思われる。(5~6)は外面に無数、貝殻条痕文が走向している一派であり、いわば水神平Ⅱ式に含まれている。(5)は明黒褐色、(6)は明赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石、雲母等々を含んでいる。

(7~8)は弥生後期に編年づけられている座光寺原式、中島式系統の土器片で、波長の長い波状文(7、10)、尖り気味の波状文(8、9)に大別される。色調は明白褐色(7)、赤褐色(8)、黒褐色(9~10)を呈し、焼成は普通である。

(11~14)は土拡内出土の土器片である。(11~12)は幅広の一条の斜縄文が押捺されており、多量の雲母が含まれ、キラキラ輝いていた。(1)は黒褐色、(2)は赤褐色を呈し、焼成は良好であり、かたく焼きしまっていた。諸磯系統に属していると思われる。(13)はへら先の尖った部分を施文具として用い、沈線文を付けたかっこうを成し、全体的に文様は縦系列に配置されている。黒褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含んでいる。縄文中期初頭の土器と想定される。(14)は無文地に隆線を渦巻状に配し、一般的に言われている加曽利E期の渦巻文様甕型土器の少破片であろう。明黒茶褐色を呈し、焼成は普通で、少量の長石、雲母を含んでいる。

(15~26)はグリット出土の土器片である。(15~17)は縄文前期終末期の十三菩提式土器の部類に属していると思われる。(15)はわずかに外反する口縁で、口唇部は平坦で爪形状の刻目文を押捺してある。外面に二条の隆帯(底面は幅広の平坦、頂上に行くに従って尖り気味を成し、ちょうど断面三角形状)を横位に貼り付け、その頂部に所々刻目を加飾してある。黒褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母を含む。(16)は口唇部が内そぎで、大きく「くの字状」に折れ浅鉢型に類似する器型を呈すると想像できる。文様構成を口唇部から下へ順々に記してみると次のようになる。口唇部の外面及び同部の内面に細く、低い粘土紐を貼ってある。外反するつけ根には低い隆帯が横位に見られ、その上に細かな連続爪形文を施してある。大きく屈曲する上部は深く、細い沈線が山形文風に三列等間隔で横走し、その下に沈線が3本横に走り、さらにその下には沈線がほぼ平行に斜走している。明黒褐色を呈し、焼成は良好で、細粒の長石、

雲母を含む。(17)は斜縄文地に低い隆帯を付け加え、その縁直下に点列文を加え文様効果を整えている。明黄褐色を呈し、焼成は普通で、大きな長石粒が認められる。(18)は破片の上部に沈線を交叉状に、下部には深い沈線を四条横に施してある。黒褐色を呈し、焼成は不良で、内面ははげている。少量の長石を含む。五領ヶ台式の仲間と想定できる。(20)は浅い沈線が垂下しており、沈線の状態は平出ⅢA式に極めて類似している。(19)は底部に近い付近の破片であり、やや内弯気味を呈している。外面に無数の沈線文が垂下し、装飾的效果を一層増している実態であり、加曾利E期の特質をにじみ出している。明茶褐色を呈し、焼成は良好で、長石粒が器壁面に白く露出してみえる。(21)は山形突起状を呈する口縁で、無文地に幅広の隆線を貼り付けてある。焼成は良好で、多量の雲母を含み、黒褐色を呈する。井戸尻Ⅲ式と編年づけられると思われる。(22~26)は外面に縦状、斜目状に貝殻条痕文を施してある。焼成は全般的に良好で、黒褐色(22、25、27)、赤褐色(24)、明白褐色(23)を呈し、全般的に少量の長石を含む。(22、25)は外面に黒々と炭化物が附着し、その用途が推察できるのではないだろうか。水神平Ⅱ式一派に入れられよう。

(27~36)は表面採集による土器片である。(27)は細い隆帯を横に貼り付け、その上に刻目や沈線を配してある。十三菩提式であろう。(28)は破片の右半分に深く、鋭い沈線を山形文風に意匠し、左半分は同様な沈線が垂下している。下島直後形式と思われる。(29)は浅い沈線がある程度の間隔をおいて垂下し、沈線文様からみて、平出ⅢA式であろう。(30、37)は櫛目文の発達が顕著なもの。弥生中期後半北原式と思われる。(31)は深く、シャープな沈線が密に縦位に走向し、沈線の施文特徴より梨久保式であると想像できえよう。

幅広の沈線がやや曲線状(32)や、細い沈線がハの字状(33)にそれぞれ描出され、加曾利EⅡ式の主な特徴点を有している。(34)は破片中央部に広い沈線が垂下し、これを中心にして文様帯が左右二分される。右側は無文帯を、左側は斜縄文をそれぞれ形成している。

(35~36)は数条による櫛描波状文が横位に流れている。(36)は大きく外反する口縁部であり中島式土器の古い方に属していると思われる。(飯塚 政美)

(2) 弥生土器 (第16図)

(1、3)は2号住居址の埋甕炉に使用された土器であり、そのうち(1)は正位の状態で(3)は逆位の状態でそれぞれ埋め込んであった。(1)は口縁部がゆるやかに外反し、頸部はややつぼまり、胴部上半でふくらみ、ここで最大径21cmを計る甕型土器で、胴部下半から底部にかけて欠損している。文様帯は口縁部から頸部にかけて集中的に配されている。文様は数条から成る横長の波状文と、数条からなる横位の沈線文と、数条の波状文と、三分区されている。胴部から下位はハケ目が不規則にみられる。内面は口縁部に横ナデや輪積痕が顕著にみられ、この土器の組成状態がよく判別可能である。赤茶褐色を呈し、焼成は良好で、多量の長石や雲母を含

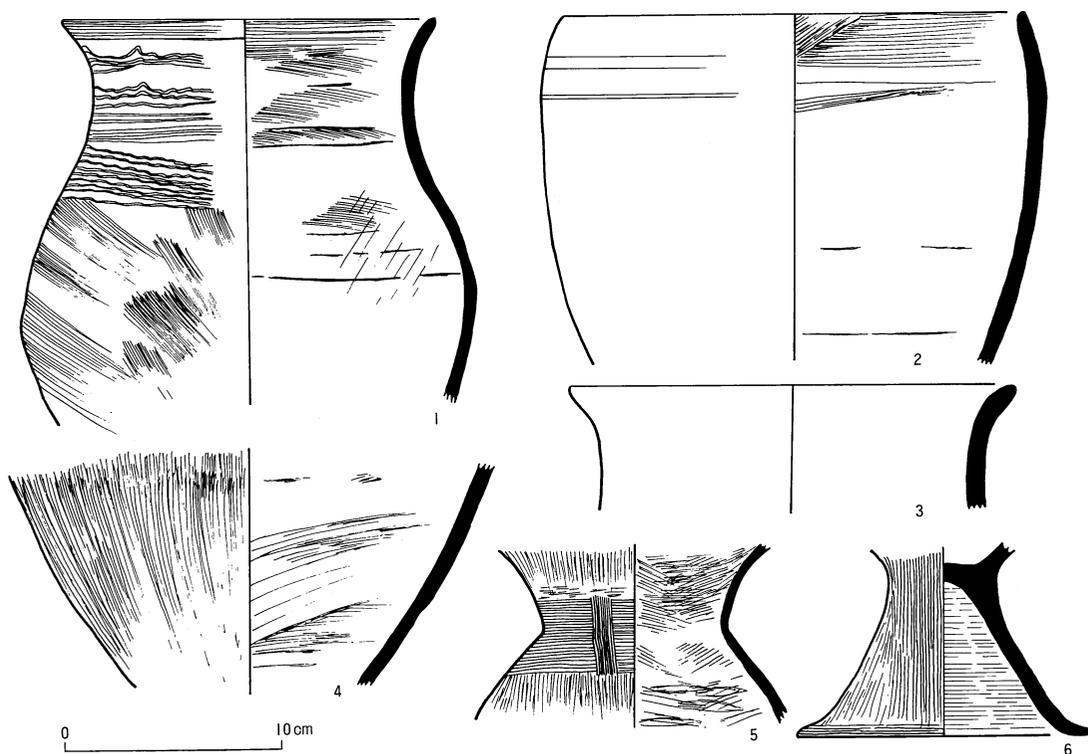
む。弥生時代後半座光寺原式土器であろう。

(3)は口縁径20.8cmを計り、やや大き目に外反する甕型土器である。黄褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成はやや悪いために内面はところどころ剥落している。座光寺原期であろう。

(2)は3号住居址出土で、口縁径22.0cmを有し、大きく内反し、口唇部は平坦を呈す。文様は内・外面にハケ目を施す。(4)は1号住居址正位埋甕炉に使用されており、口縁部と底部は大部分欠損してしまっている。外面はハケ目、内面はへらケズリ痕が認められる程度で、割合に簡素な土器であろう。赤褐色を呈し、焼成は普通で、少量の長石を含む。

(5~6)は2号住居址より単独に出土した土器であり、(5)は甕型、(6)は高環型を呈する。(5)は口縁上部、胴部から底部にかけて欠損しているために微妙な編年確立は不可能である。口頸部付近に数条にわたって沈線が横走や縦走し、沈線文様が施されていない部分にはへら磨きが丁寧にゆきとどいている。内・外面ともに赤色塗彩され、その上を研磨してあるので赤々と美しい光沢を放っていた。焼成は良好で、少量の長石を含む。

(6)は坏部が欠損し、脚部だけが残存している容相である。脚部の下端は大きくハの字状に開口し、高環土器時期決定の一特徴を描出している。外面は赤色塗彩してあり、塗彩後、丁寧に磨き出している。外面はへら磨き、内面には櫛目文を同心階段状に施してある。焼成は良好で、少量の長石を含む。(5~6)は中島式土器であろう。

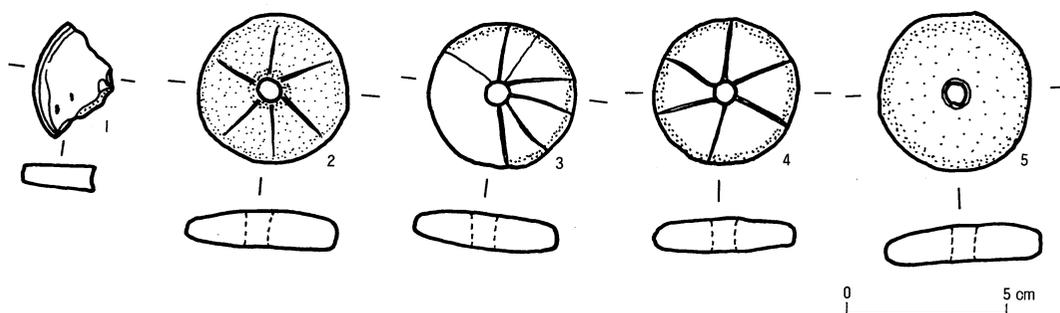


第16図 弥生土器実測図

(3) 土製品 (第17図)

(1~5)はY-2号住居址出土の土製紡錘車である。(1)は四分の一位、(3)は半分位残存し、(2、4、5)は完型品である。全般的に平坦状を呈し、中央部に直径6~8mm位の真円に近い孔があけられている。5点の紡錘車は全体の直径が4.5cm位とほぼ同一規格で製作されている点に興味深く、今後の類例を待ちたい。表面に中央の小円を中心にして6~8本の細い沈線が、ほぼ円周に沿って等間隔に配置されている。この文様は紡錘車の機能からみて、単に装飾的につけたものであろう。いずれにしても、一軒の住居址から5点の紡錘車出土は極めてまれである。

(飯塚 政美)



第17図 土製品実測図

(4) 出土土器 2 (第18図)

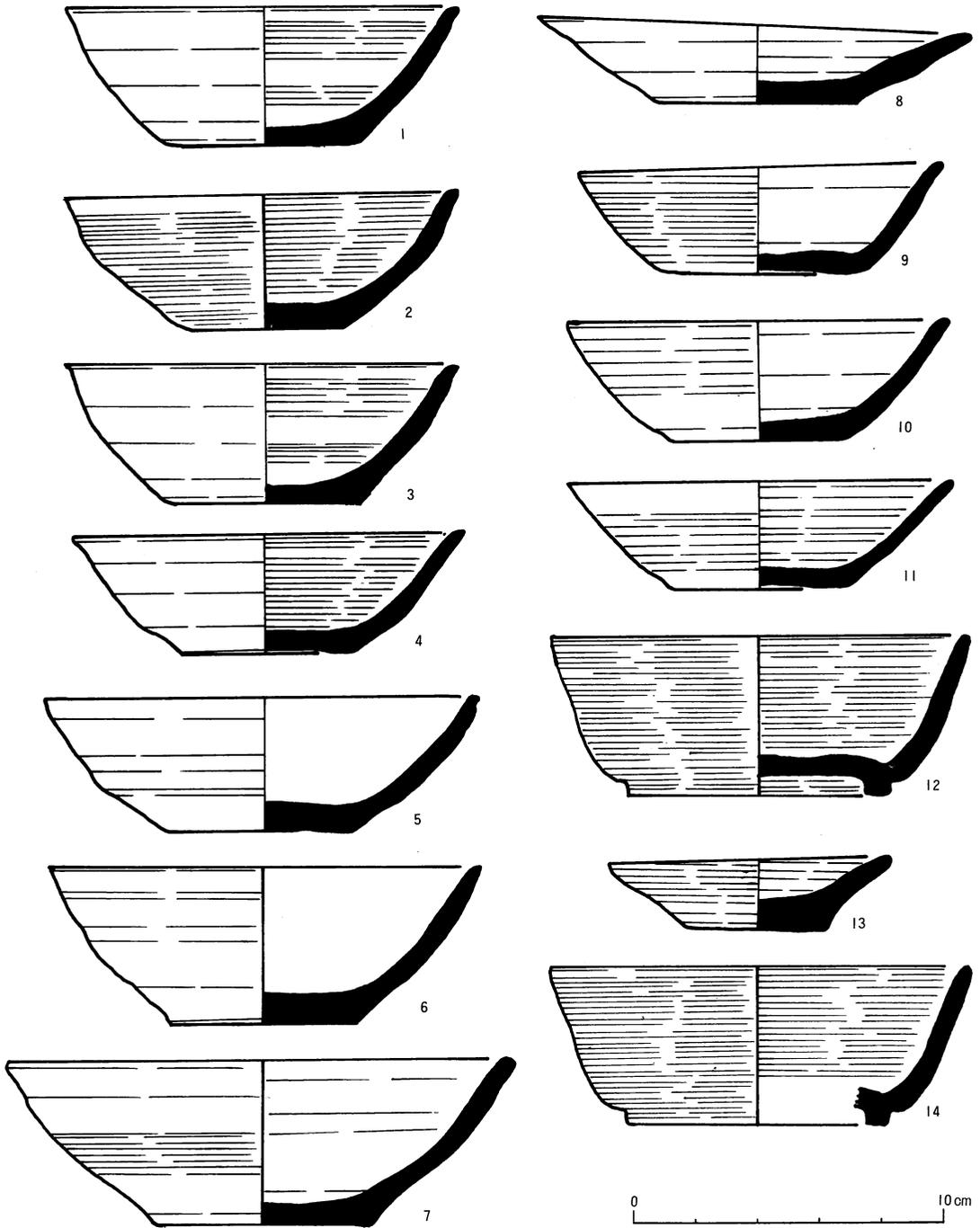
平安時代の竪穴住居址が三軒検出された。これらの住居址から出土した土器類は土師器と須恵器が主体となり、わずかに灰釉陶器片が含まれている。器型は土師器では坏、皿、須恵器では坏が主体となっていた。灰釉陶器類は細片であったために器型は判断しがたい。

H-1号住居址出土土師器は第18図(1~8)であり、これらは全て同住居址のカマド内より検出されている。(13)の土師器小型皿はH-3号住居址カマド内より出土している。

一般的に体部は直線的あるいはわずかに内弯して開き、口縁端が直線的に開くもの、わずかに外反するものとがある。底部は回転糸切り技法が大部分を占めている。底部に回転糸切り技法を採り入れているのは(1~7、9)であり、(8)はへラケズリ底を呈している。(1~2)は内面黒色土器で、塗色したあと丁寧に磨いてある。単に内面研磨を施してあるのは(3、5、7、8)である。

焼成は一般的に良好であったが、(6)のように極めて悪く、内・外面ともに生焼きのような状態でザラザラしていた。

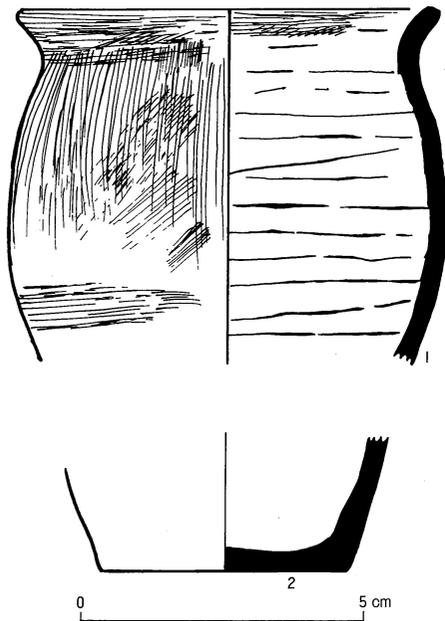
須恵器は胎土、焼成により2種に分類できる。(9)は黒ネズミ色を呈し、体部は直線状を成し、口端部はわずかに外反する。底部は糸切り底で、中央部が若干上底になっている。



第18图 出土土器实测图2

(10)は色調が(9)とほぼ同様であり、体部から口縁部にかけてきれいな直線状を描く、底部は回転糸切りで、平坦状である。(11)は胎土が白灰色に近く、器壁が薄いのが特徴的である。(9~11)は須恵器の極、一般的な坏である。(12、14)は須恵器高台付坏である。高台は付高台で、断面台形状となり、若干、内反気味を呈している。底部は静止糸切り底である。

(9~12、14)はH-2号住居址カマド南側ピット内より出土。(第18図)に掲載されている土師器・須恵器は9世紀後半の時期に該当するものと思われる。(飯塚 政美)



第19図 出土土器実測図3

(5) 出土土器 3 (第19図)

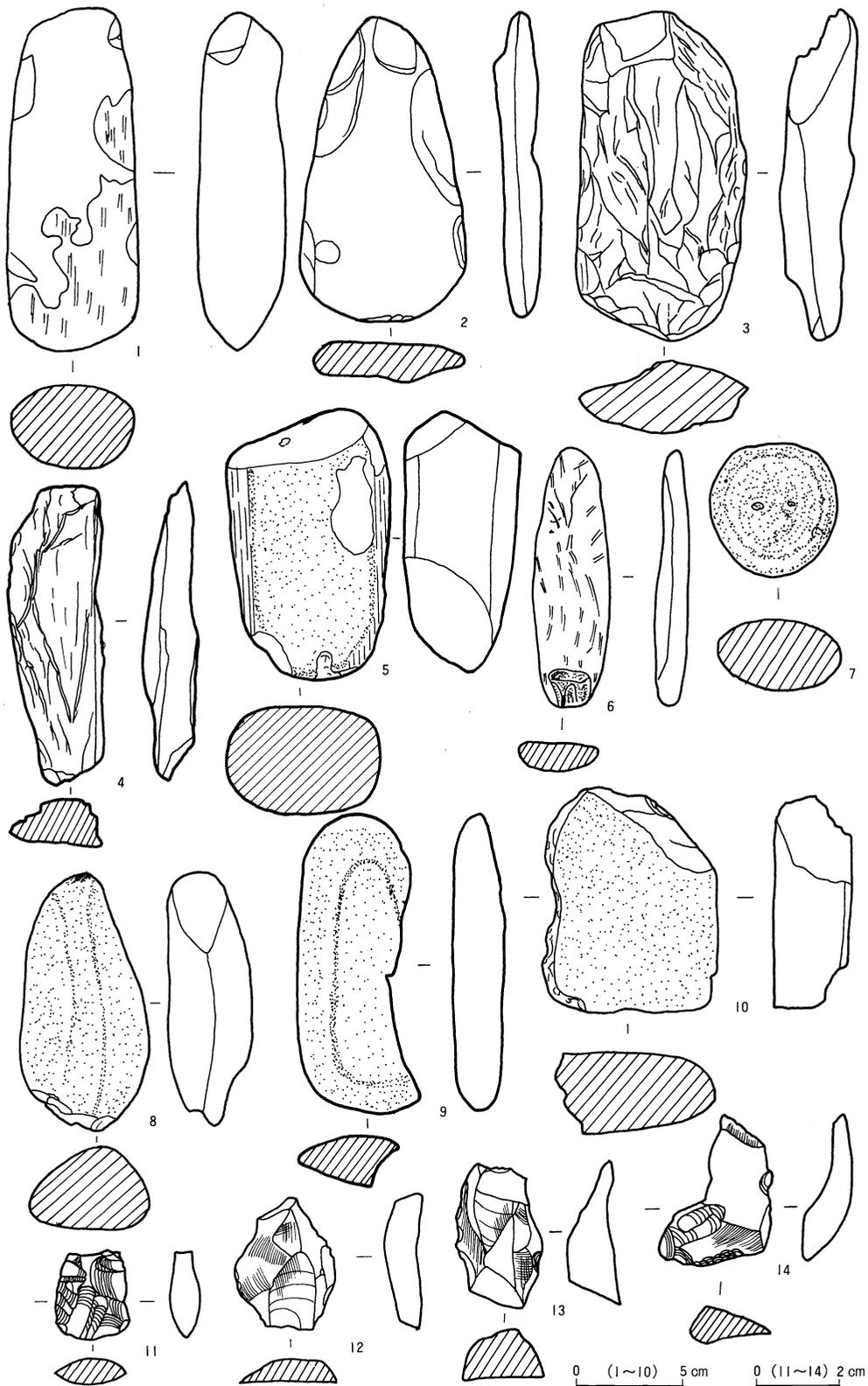
(1)はH-2号住居址カマド南側より出土した土師器の小型甕である。口縁径30.4cm、最大胴径15.2cmを計り、胴下部から底部は欠損している。全体的な器型の変化は次の通りである。平縁口縁で、口唇部は平坦、口縁はくの字状に屈曲し、最大径を胴部中央部に持ち、胴下部から底部にかけて徐々につぶまってしまう。口縁部の外・内面には横位のハケ目、胴部外面には縦位状のハケ目が走っている。内面には輪積痕が明瞭に認められ、この土器の製作工程が把握できる。胎土には大きな長石粒が多量に含まれ、焼成は中位、茶褐色を呈している。この土器は煮沸に使用されたとみえて、所々に炭化物が附着していた。国分期の土師器で9世紀後半と思われる。

(2)はH-2号住居址カマド内より出土した土師器木葉底である。諸々の状態及び項目はほぼ(1)と同様であるので、(1)を大いに参考にしてもらいたい。(飯塚 政美)

2. 石 器 (第20図)

(1)はB区S-5出土の磨製石斧で、刃部の先端は極めて鋭角を呈し、弥生時代独特の蛤刃の一種かと思われる。刃部周辺には稜をつくり、ツルツルな状態程に磨いてある。緑泥岩を素材としている。(2)はY-2号住居址覆土出土。一枚の板状軟質砂岩を第1次加工し、下部がやや開き気味の撥形打製石斧である。剝離調整は極めてラフである。(3~4)はA区表面採集の短冊形に近似する打製石斧で、輝緑岩を利用。(4)は左側面が欠損している。

(5、7、9、10)は磨石の仲間であり、これらは、形態からして円形状(7)、楕円形状(5)、偏



第20图 出土石器实测图

平楕円形状(9)、板状方形形状(10)に大別できる。(9~10)は機能面からみて、砥石のように使用したのではないだろうか。(5)は硬砂岩、(7)は花崗岩、(9~10)は緑泥岩を使用、(5、9~10)は集石炉から出土しているので、表面に炭化物が付着。(9)にいたっては火を受けたとみえて、赤く変色していた。(4)はA区の表採。

(6、8)は下端部の一部分に打痕が認められ、タタキ石としての用途を実証できる。(6)は、Y-2号住居址床面、(8)は集石炉からそれぞれ出土。(8)は緑泥岩を材としている。

(11)はY-2号住居址出土の黒曜石製のラウンドスクレーパーであり、剥離調整状態は良好である。

(12~13)は黒曜石製の剥片石器であり、刃部はサイドにわずかにつけられている。(12)はA区の表面採集、(13)はB区の表面採集。(14)はY-1号住居址出土の黒曜石製の剥片石器で、ノッチを付けわずかな調整がみられる。 (飯塚 政美)

第Ⅳ章 ま と め

箕輪町内には200ヶ所に及ぶ多数の遺跡が知られている。それらの遺跡分布状況を見る時、立地する地形からいくつかのグループに分類することができる。天竜川右岸段丘上（河岸段丘突端）のベルト地帯は町内において最も濃密な遺跡地帯である。

上の林遺跡は河岸段丘上ベルト地帯に位置する中心的な存在であり、30,000㎡前後の広さを有する。そして時代の範囲や複合状況など遺跡の内容は複雑な様相を呈している。

この遺跡は以前から出土遺物が豊富な場所として知られ、土地の子供達は、土器拾いを遊びとしていたようである。この遺跡に本格的な調査が始まったのは昭和55年からであり、箕輪工業高等学校の改築に伴い、今回で四次の調査が実施された。敷地全体が遺跡地帯であるため発掘のたびに遺構・遺物が多数確認されている。

調査結果の概要は次の通りである。

- 縄文時代集石炉 1ヶ所
- 縄文時代土拵 1ヶ所
- 弥生時代住居址 3ヶ所
- 平安時代住居址 3ヶ所

このことでもわかるように縄文時代の住居址は一ヶ所も検出されなかった。これは第一次から第三次における調査では、縄文時代の住居址が多数検出されていたことから考えるとふしぎなことである。遺跡が南側に寄るにつれ縄文時代の遺構が少なくなる現象が見える。逆に弥生時代や平安時代の遺構が増している。

南北に地形的区切りのある古状の段丘上突端であるため、地形的な変化は少ないが、各時代の自然環境を考えての住居設定の故であろうと推定する。また弥生時代に入り、下段の沖積面における水田経営との関係も合わせて考える必要がある。今後における発掘調査の機会に検討したい問題である。

遺構は特別なものは見られないが、縄文時代と考える集石炉（焼石炉）は町内の類例としては少ないものである。一の宮並木下遺跡に検出された状況と類似しているが、遺構内からの遺物が無いため時期決定が困難である。石を集めその中で火を焚いていると見られるため、食物を焼くような施設ではないかと推測される。

遺物では、Y-2号住居址から出土している5個の紡錘車と管玉が特記されるものである。同一住居址内から5個という出土例はめずらしく、周辺では例を見ない。また床面からは管玉が1個発見された。これは鉄石英（別名赤玉石）を材としており、穴は管錐を用いて丁寧にあけている。

以上本発掘調査における遺構・遺物の概要を記したが、これまで実施した一～四次の発掘調査や、調査以外に発見されている遺物等を総合的に判断し、上の林遺跡の性格を検討しなければならない。

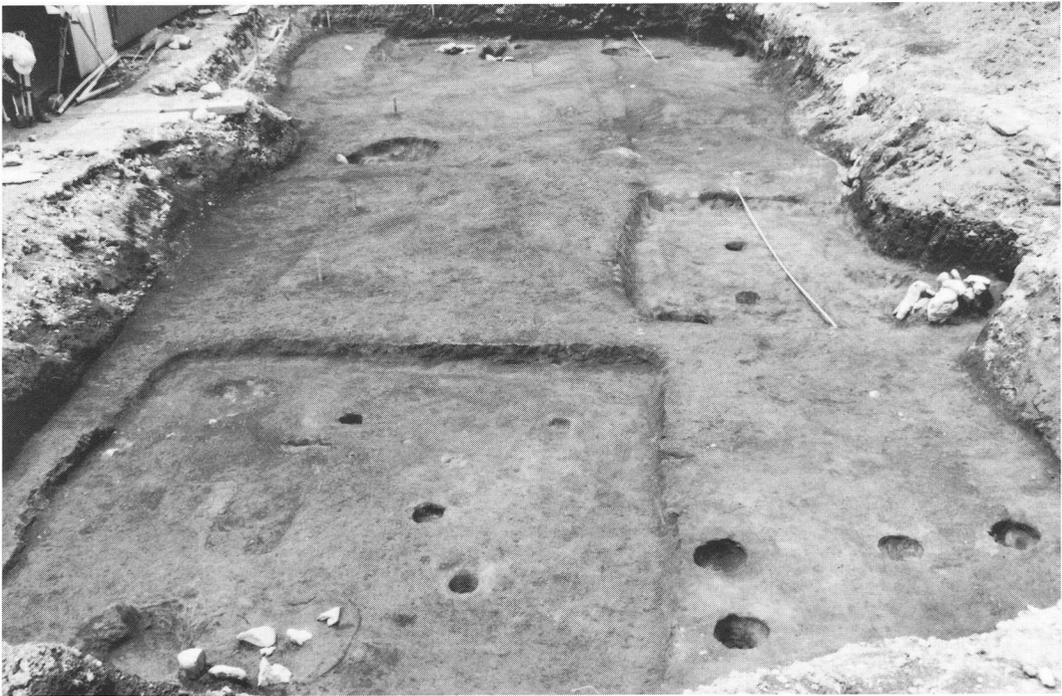
発掘調査にあたり、伊那市からおいでいただいた多くの作業員の皆様、また箕輪町内から参加して下さった方々に心からお礼を申し上げます。また、現地調査及び報告書作製にあたり、ご協力下さった伊那市教育委員会の飯塚政美氏にお礼を申し上げます。

柴 登巳夫

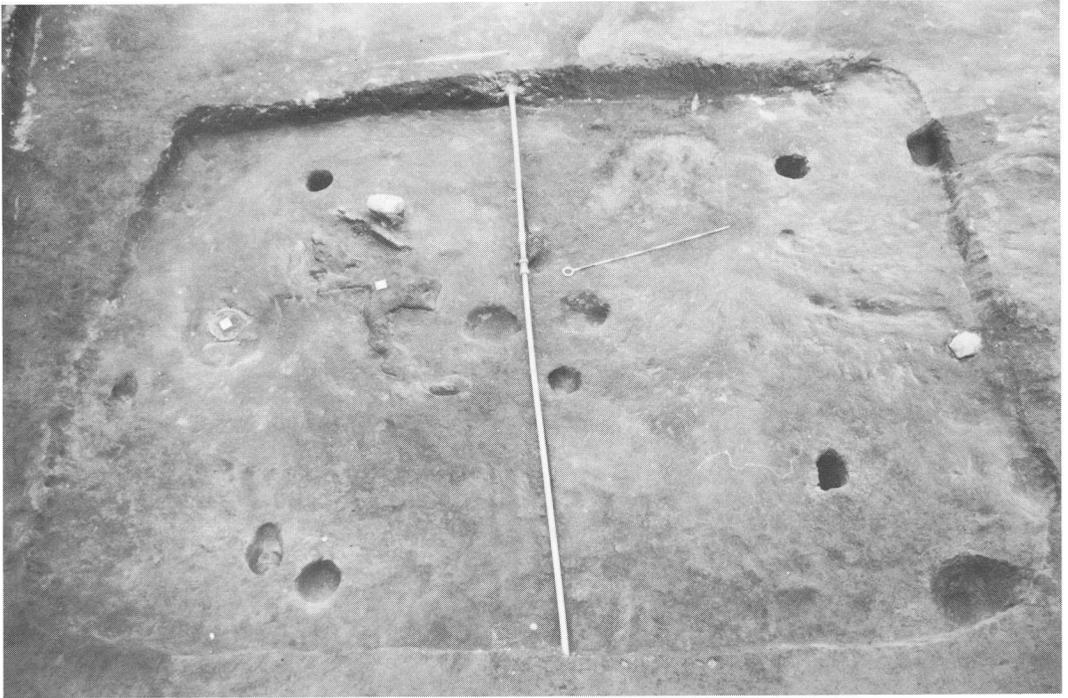
版 図



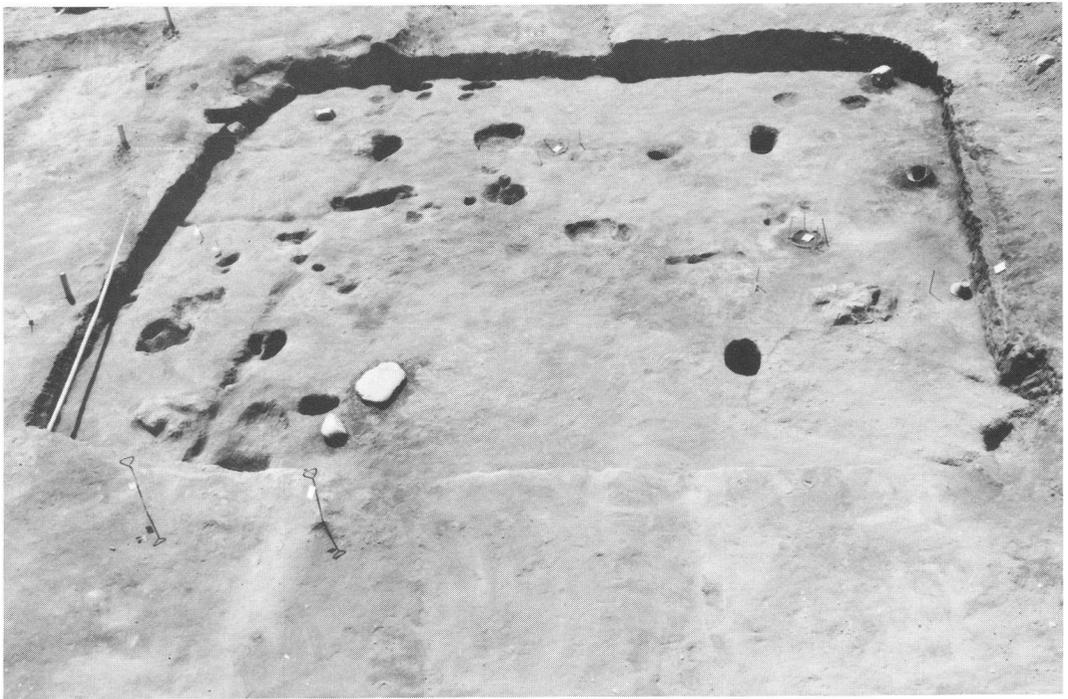
発掘調査地



遺 構 状 況



Y-1号住居址



Y-2号住居址



Y-3号住居址



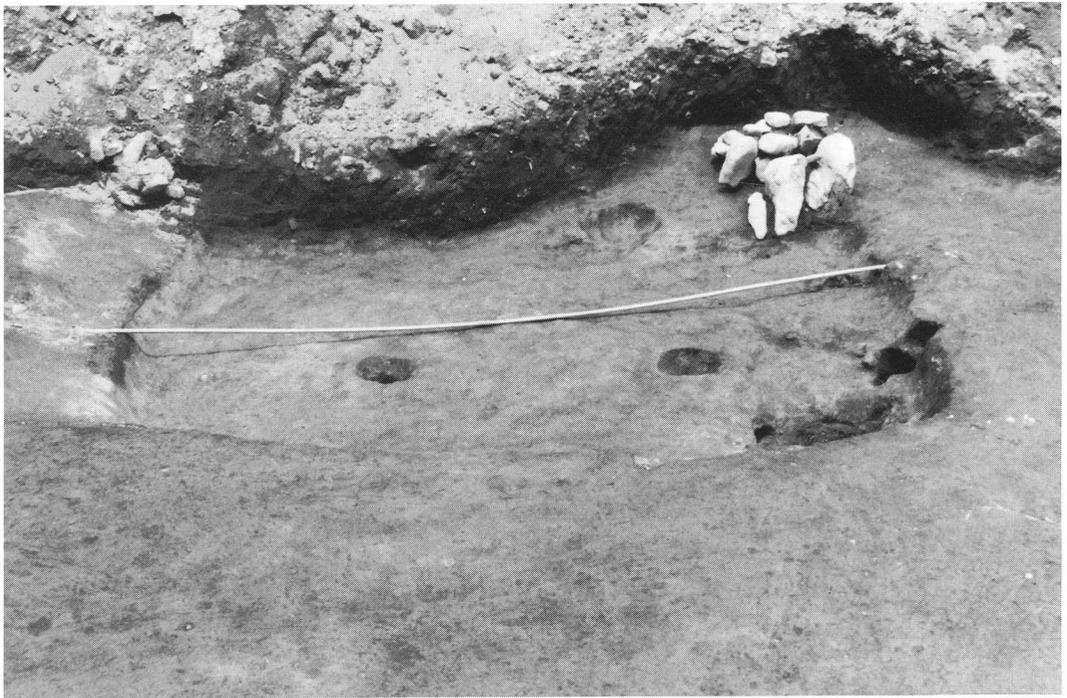
建造物址



H-1、Y-3号住居址



H-2号住居址





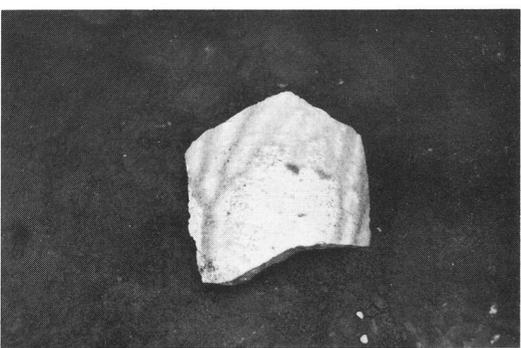
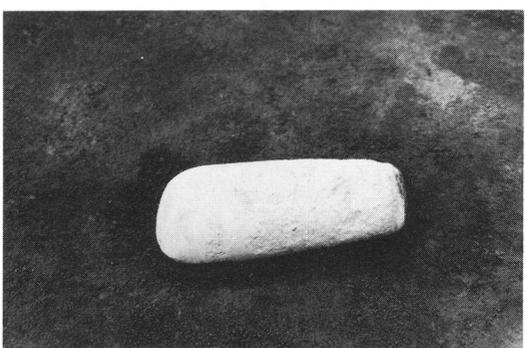
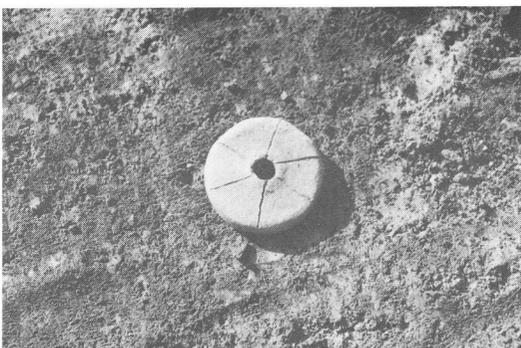
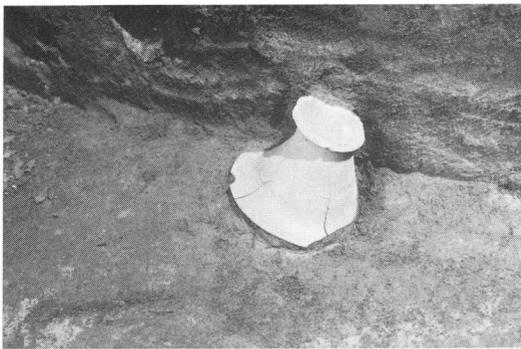
集石炉



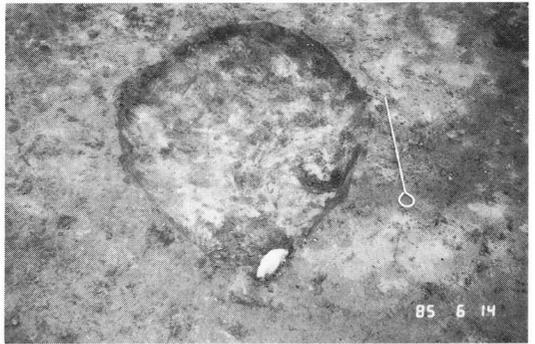
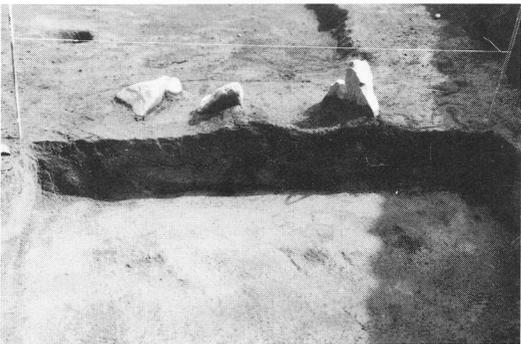
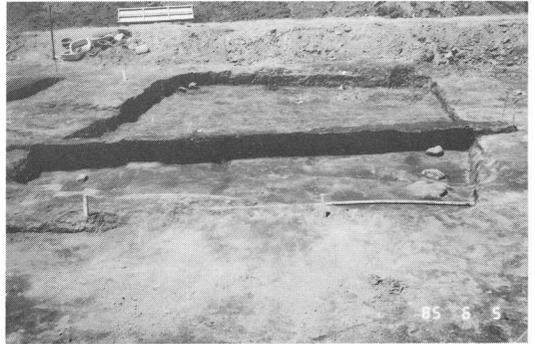
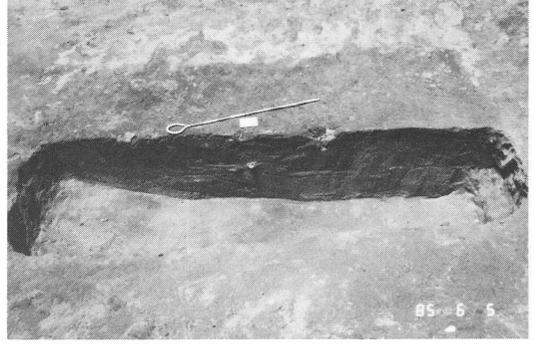
土坑



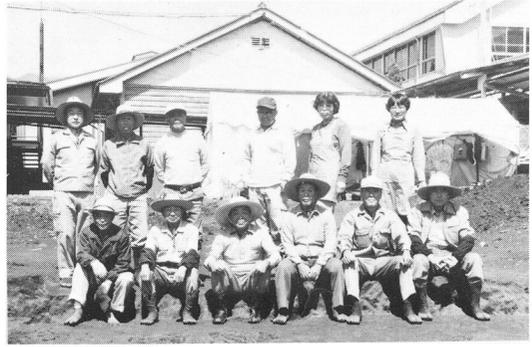
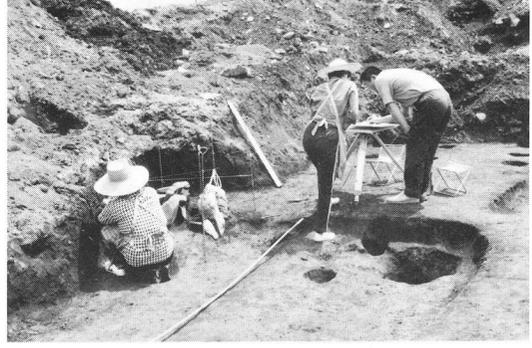
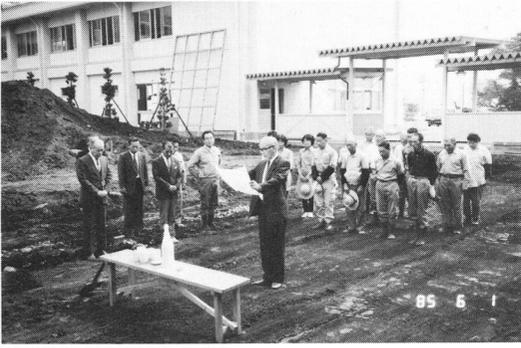
カマド状況



遺物出土状況



調査進行状況



発掘風景

上の林遺跡

(第4次)

長野県上伊那郡箕輪町 緊急発掘調査報告書

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月20日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 伊那市 (株)小松総合印刷所